
平成31年度 第2回午前

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

平成31年2月2日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は21ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

次の――線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

- ① カイコのヨウチユウを育てる。
- ② 野球の試合にヤブれる。
- ③ 手をあげてオウダン歩道を渡わたる。
- ④ 鉄がジシヤクにすい寄せられる。
- ⑤ 紅茶にサトウを入れてあまくした。
- ⑥ 春のオトズレを待ちのぞむ。
- ⑦ メンボウで耳掃除をする。
- ⑧ 種子島で人工エイセイが打ち上げられた。
- ⑨ ストープにトウユを入れる。
- ⑩ 友人の結婚式にシウタイがされた。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

人間以外の動物にとって、生きることは食べることである。しかし、それを実現するには、いつ、どこで、何を、だれと、どうやって食べるか、という五つの課題を乗り越えねばならない。現代の科学技術と流通革命は、その多くを個人の自由になるように解決してきた。24時間営業のコンビニエンスストアや自動販売機。車や飛行機などの輸送手段や、インターネットを利用した通信手段。電子レンジやファストフードなどの調理や保存の技術。これらは私たちが、いつでも、どこでも、どんなものでも、好きなように食べることを可能にした。

しかし、技術によつては変えられない課題もある。①それは、だれと食べるかということだ。

ふだん単独生活をしているクマやカモシカのような動物には、この課題は必要ない。なわばりをつくって他者の侵入を防いだり、他者と出会わないようにして餌資源を確保したりすればいいからだ。しかし、群れをつくる動物は常にこの問題に直面する。とりわけ複雑な社会生活を営む人間にとつて、いっしょに食べる相手は重要である。もちろん、移動手段の革新によつて、遠くに住む知人や親族に会うことができるようになった。だが、だれと食卓を囲むかは、昔も今も個人の自由裁量によつては決められない。

古来、人間の食事には、栄養の補給以外にも他者との関係の維持や調整という機能が付与されてきた。いやむしろ、他者とのいい関係をつくるために食事の場や(注1)調度、食器、メニュー、調理法、服装からマナーにいたるまで、多様な技術が考案されてきたといつても過言ではない。どの文化でも1の場として食事を機能させるために、莫大な時間と金を消費してきたのである。それは効率化とはむしろ逆行する特徴をもっている。

サルサルの食事は人間とは正反対である。群れで暮らすサルたちは、食べるときは分散して、なるべく仲間と顔を合わせないよううにする。数や場所が限られている自然の食物を食べようとすると、どうしても仲間とはち合わせてけんかになる。だから、仲間がすでに占有している場所は避けて、別の場所で食物を探そうとするのだ。でも、あまり広く分散すると、肉食動物や(注2)猛禽類にねらわれて命を落とすおそれが生じる。仲間といれば外敵の発見効率上がるし、自分がねらわれる2が下がる。そこで、仲間と適当な距離を置いて食事をすることになる。

しかし、食物が限られていけば、仲間と出くわしてしまふことはある。そのときは、弱いほうのサルが食物から手を引つこめ、強いサルに場所を譲る。サルたちは互いにどちらが強いかわきまえていて、その序列にしたがって行動する。それに反するような行動をとると、周りのサルが寄つてたかつてそれをとがめる。②優劣の序列を守るように、勝者に味方するのである。

強いサルは食物を独占し、他のサルにそれを分けることはない。サルの社会では、食物を困んで仲よく食事をする光景は決して見られない。でも、サルの基本的な食物は植物なので、強いサルに独占されたからといって食物に困るわけではない。ちよつと移動すれば、食べられるフルーツや葉っぱが見つかる。要するに、サル社会のルールは、食べるときはけんかしないうに分散して個食をしましょう、そのためには弱いサルが広く分散しましょう、ということなのである。

けんかの種となるような食物を分け合い、仲よく向かい合つて食べるなんて、サルから見たらとんでもない行為である。なぜこんなことに人間はわざわざ時間をかけるのだろうか。

それは、相手とじっくり向かい合い、気持ちを通じ合わせながら信頼関係を築くためであると思ふ。相手と③しような食物をあえて間に置き、けんかをせずに平和な関係であることを前提にして、食べる行為を同調させることが大切なのだ。同じ物をいっしょに食べることによって、ともに生きようとする実感がわいてくる。それが信頼する気持ち、ともに歩もうとする気持ちを生み出すのだと思ふ。

ところが、前述した近年の技術はこの人間的な食事の時間を短縮させ、個食を増加させて社会関係の④を妨げているように見える。③自分の好きなものを好きな時間と場所で好きなように食べるには、むしろ相手がいないほうがいい。そう考へる人が増えているのではないだろうか。

でも、それは私たちがこれまで食事によって育ててきた共感能力や連帯能力を低下させる。個人の利益だけを追求する気持ちが強まり、仲間と同調し、仲間のために何かしてあげたいという心が弱くなる。勝ち負けが気になり、勝ち馬に乗ろうとする傾向が強まって、自分に都合のいい仲間を求めるようになる。つまり、現代の私たちはサルの社会に似た閉鎖的な個人主義社会をつくろうとしているように見えるのだ。

2013年に、和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。登録にいたったのは、自然を尊重する日本人の基本精神にの

つとり、地域の自然特性に見合った食の慣習や行事を通じて家族や地域コミュニティの結びつきを強める重要な文化だからというのが主な理由だ。大変いいことだと思う。これを機に、和食と日本人の暮らしについて過去の歴史をふり返り、食の文化を育んできた日本列島の自然と人間との関わりについて多くの人々が思いをめぐらすようになってほしい。

私の専門分野である(注3)霊長類学は、人間に近い動物の生き方から人間の進化や文化を考える学問である。人間以外のサルや類人猿(ゴリラやチンパンジー)を野生の生息地で追っていると、「生きることは食べることだ」と思い知らされる。彼らの主な食べ物は自然のあちこちに散らばり、季節によってその姿を変える植物だ。いつ、どこで、何を、どのように食べるかが、一日の大きな関心事である。群れをつくって暮らすサルたちにとっては、それに加えて「だれと食べるか」が重要となる。いっしょに食べる相手によって、自分がどのように、どのくらい食物に手を出せるかが変わるし、相手を選ばないと、食べたいものも食べられなくなってしまうからだ。

日本列島には43万63万年前からニホンザルがすみついてきた。人間が大陸から渡ってきたのはたかだか2万数千年前だから、彼らのほうがずっと先輩である。日本の山へ出かけてサルを観察すると、彼らがいかにうまく四季の食材を食べ分けているかがわかる。新緑の春には若葉、灼熱の夏は果実と昆虫、実りの秋は熟した色とりどりの果実、そして冷たい冬は落ちたドングリや樹皮をかじって過ごす。

サルに近い身体をもった人間も、これらの四季の変化に同じように反応する。もえいずる春には山菜が欲しくなるし、秋には真っ赤に熟れた柿やリンゴが目がほころぶ。サルと同じように人間も長い時間をかけて植物と(注4)共進化をとげてきた証しである。人間の五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)は食を通じて自然の変化を的確に感知するようにつくられてきたのだ。

人間にはサルと違うところが二つある。まず、人間は食材を調理して食べるといふ点だ。植物は虫や動物に食べられないように、硬い繊維や(注5)二次代謝物で防御している。それを水にさらしたり、火を加えたりして食べやすくする方法を人間は発達させた。さらに人間は川や海にすむ貝や魚を食材に加え、野生の動植物を飼養したり栽培したりすることによって得やすく、食べやすく、美味にする技術を手にした。人間は文化的雑食者であるともいわれる。日本人もその独特な文化によって、ニホンザルに比べると圧倒的に多様な食材を手に入れることができたのである。

もう一つの違いは、人間が食事を人と人をつなぐコミュニケーションとして利用してきたことだ。サルにとって食べるこ

とは、仲間との(注6)あつれきを引き起こす原因になる。自然の食物の量は限られているから、複数の仲間と同じ食物に手を出せばけんかになる。それを防ぐために、ニホンザルでは弱いサルが強いサルに遠慮して手を出さないルールが徹底している。強いサルは食物を独占し、決して仲間に分けたりはしない。そのため、弱いサルは場所を移動して別の食物を探すことになる。ところが、人間はできるだけ食物を仲間といっしょに食べようとする。ひとりでも食べられるのに、わざわざ食物を仲間の元へもち寄って共食するのだ。

④ 共食の(注7)萌芽はすでにゴリラやチンパンジーに見られる。チンパンジーは時折狩猟をする。力の強いオスがサルやムササビなどを捕まえてその肉を食べるのだ。そんなとき、獲物を捕らえたオスの周りには他のオスやメスたちが群がってくる。めつたに得られない肉の分配にあずかるうとしてやってくるのだ。肉をもったオスは力が強いので、その肉を独占して食べようとすればできないことはない。しかし、他のチンパンジーの要求は(注8)執拗で、なかなか拒むことができず、ついには引きちぎってとるのを許してしまう。チンパンジーの世界では、どんなに体の大きなオスでも力だけでは社会的地位を保てず、仲間の支持が必要である。肉の分配はその支持を得るために使われているようなのだ。だから、サルとは違って、チンパンジーはもっぱら弱い個体が強い個体に食物の分配を要求し、いっしょに食べるのである。

最近私たちは、チンパンジーと同じようにゴリラも、オスが大きなフルーツをメスや子どもたちに分配しているのを観察した。オランウータンにも食物の分配行動があることが知られているから、ヒト科の類人猿はすべて、おとなの間で食物が分配されるといふ、霊長類にはまれな特徴をもっていることがわかる。人間はその特徴を受け継ぎ、さらに食物を用いて互いの関係を調整する社会技術を発達させたのだ。



食事は、人間どうしが無理なく対面できる貴重な機会である。人間の顔、とりわけ目は、対面コミュニケーションに都合よくつくられている。人間の目には、サルや類人猿の目と違って白目がある。この白目のおかげで、1〜2メートル離れて対面すると、相手の目の動きから心の状態を読みとることができるのだ。

顔の表情や目の動きをモニターしながら相手の心の動きを知る能力は、人間が生まれつきもっているもので習得する必要が

ない。しかも、目の色は違っていても、すべての人間に白目がある。ということは、白目は人間にとって古い特徴でありながら、チンパンジーとの共通祖先と分かれてから獲得した特徴だということだ。対面して相手の目の動きを追いながら同調し、共感する間柄をつくることができるのが、人間に特有な能力なのだ。それが人間に独特な強い信頼関係を育み、高度で複雑な社会の資本となってきたと考えることができる。

実は、日本人の暮らしも、食物を仲間といっしょにどう食べるかという工夫のもとにつくられている。日本家屋は開放的で、食事をする部屋は庭に向かって開いている。四季折々の自然の変化を仲間と感じ合いながら食べられるように設計されているのだ。鳥や虫の声が響き、多彩な食卓の料理が人々を(注9)饒舌にする。その様子をだれも見たり聞いたりでき、外から気軽に参加できる仕組みが、日本家屋の造りや和食の作法に組みこまれている。

だが、昨今の日本の暮らしはプライバシーと効率を重んじるあまり、食事のもつコミュニケーションの役割を忘れていようと思う。和食の遺産登録を機に、自然と人、人と人とを豊かにつなぐ日本の和の伝統を思い返してほしい。

(山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』より)

(注1) 調度……日常に使う道具類、家具などをいう。

(注2) 猛禽類……鋭い口ばしと爪をもち、他の動物を食べる大型の鳥の総称。

(注3) 霊長類……人間とサルの間をまとめて言う言葉。

(注4) 共進化……異種の生物が相互に関係しあって、ともに進化すること。

(注5) 二次代謝物……生物自身が生成する抗菌物質や色素などの化合物。

(注6) あつれき……仲が悪くなること。

(注7) 萌芽……新しい物事が起こりはじめること。

(注8) 執拗……しつこいこと。

(注9) 饒舌……おしゃべり。

問1 — 線部①「それは、だれと食べるかということだ」とありますが、人間の食事においてそのようなことが課題になるのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

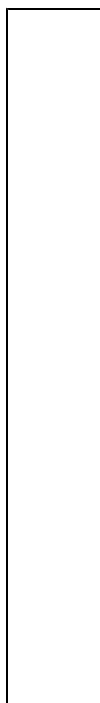
- ア. 人間は食事のときに、いっしょに食べる相手と信頼関係を築いていくから。
- イ. 人間は食事のときに、日常生活の寂しさを紛らわす相手を選ぶ必要があるから。
- ウ. 人間は食事のときに、いっしょに食べる相手のマナー違反は許しがたく感じるから。
- エ. 人間は食事のときに、好みの異なる人とは気をつかい楽しくなくなってしまいうから。

問2 本文中の空らん 1 } 4 に当てはまる適切な二字熟語を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア. 生存
- イ. 確率
- ウ. 適確
- エ. 社交
- オ. 比較
- カ. 構築
- キ. 距離
- ク. 競合

問3 — 線部②「優劣の序列を守るように、勝者に味方するのである」とありますが、周りのサルがそのようにするのは何のためですか。二十五字以上三十五字以内で答えなさい。(句読点などの記号は字数にふくみません)

問4 — 線部③「自分の好きなものを好きな時間と場所で好きなように食べるには、むしろ相手がないほうがいい」とありますが、このような人間の暮らしを別の言い方で言いかえるとどういう言い方ができますか。次の空らん^{らん}に当てはまるように、本文中の★印よりあとの部分から十四字の表現をぬき出して、答えなさい。(句読点などの記号は字数にふくみません)



暮らし

問5 — 線部④「共食の萌芽^{ほうが}はすでにゴリラやチンパンジーに見られる」とありますが、ゴリラやチンパンジーが共食するのはどうしてですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・弱い個体は、力が強く体が大きいオスと常にいっしょに行動をし、気に入られると捕^とらえた獲物^{えもの}を分けてもらえるから。
- イ・弱い個体は、力が強く体が大きいオスと集団で戦って獲物をうばい、弱い個体の集団の中で分け合うという習性があるから。
- ウ・力が強く体が大きいオスは、獲物を捕らえることのできない弱い個体に、獲物を分けてやる親切な心を持っているから。
- エ・力が強く体が大きいオスは、捕らえた獲物を仲間に分け与^{あた}えることによって、仲間の支持を得て社会的地位を保つから。

問6 この文章の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア．群れを作って暮らすニホンザルにとって重要なことは、食べたものを食べるために、強いサルから離れて、弱いサルどうしが集まって結びつきを高めることにある。

イ．ゴリラやチンパンジーは、力の強いオスだけが狩りをし、捕らえた獲物をメスが子どもたちに分けて与え、子どもたちの食べ残しを大人たちが食べる傾向にある。

ウ．和食がユネスコの無形文化遺産に登録されたことをきっかけにして、自然を尊重する日本人の基本精神にのっとり、食の慣習や行事を残しつつ、近年の技術を改革してほしい。

エ．生きることは食することであるといえる多くの動物たちと違い、個食するのか共食するのかということとは、人間と同様に、群れをつくって暮らすサルたちにとって重要な課題となる。

オ．伝統的な日本家屋は、食事をするとき、庭が見える部屋で鳥や虫の鳴き声を聞き、季節の変化を感じあいながら、だれもが気軽にコミュニケーションをとれるように設計されている。

三

主人公照葉は、総理大臣になりたいという夢を持ち、「ソーリ」と呼ばれている小学五年生です。次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

三学期になって一週間ほどたった日のこと。なんだか麻緒が元気ないように見えた。ずっとそれが気になっていたの、あたしは、給食のあとにそっときいてみた。

「麻緒、なんか朝から元気がないみたいだけど、もしかして、風邪？」

「えっ？ まさか。風邪なんかひいたら、ママにおこられちゃうよ。受験生がいるのに」

麻緒は、そういつて笑った。そうか、麻緒の家では、麻菜ちゃんの受験が近いからたいへんなのだ。それにしても、やっぱり麻緒の様子がふつうじゃないように思っ、病気とかじゃないなら、よかった」と、なるべく明るい口調でいった。ところが、麻緒は少し思いつめたような表情で口を開く。

「ねえ、照葉、美容師やってる従姉の人に、世の中を明るくするために、政治家になったらいいって、いわれたんだよね」
「なんできゆうにそんなことをいうのだろう。思わず首をかしげながら見ると、麻緒はすっと視線を落とした。」

「……うん。でも、あれ、ただの冗談だから」

あたしはいいわけするようにいった。

「そうかなあ。照葉は、学級委員とか、あたしなんかより、むいてると思うんだよね」

「……」

「だから、^①照葉、政治家目ざしなよ。もちろん、自分がなりたいたいものは、自分で決めるんだけど。でも、あたしは、応援するよ。だからさ、大人になったら、ほんとに政治家になればいいよ。それで、ちゃんと、子どものこととか、学校のこと、考えてよ」

麻緒は、あたしのことをじっと見つめて、そういった。でも、このときは、麻緒がなんでそんなことをいったのか、さっぱりわからなかった。

次の日、麻緒は学校を休んだ。放課後、あたしは学校で配られたプリントをもって、麻緒の家のあるイチヨウ通り二番館へ

行った。エントランスで部屋番号をおすと、^②応答したのは、麻緒のお母さんだった。

「あら、照葉ちゃん。ごめんなさいね。麻緒、出られないから」

「あの、プリントもつてきたんですけど」

「わざわざありがとう。ポストに入れておいてくれる？」

「あ、はい。麻緒、病気ですか？」

「だいじょうぶよ。心配しないでね。ありがとう」

それで、ぶつと音がとぎれた。しかたなしに、プリントをポストに入れてから、家に帰った。

その次の日も、麻緒は休んだ。今まで、学校を休むことなんて、めったになかったのに。

あたしは休む前の日に、麻緒の元気がなかったことを思いだした。それで、放課後、職員室に行った。もしかしたら、吉田^{よしだ}先生ならなにか知っているかもしれないと思ったのだ。

「ああ、石橋^{いしばし}さんのことね」

先生はちよつとこまったな、というふうに眉^{まゆ}をよせた。

「病気じゃないんですか？」

「それがね。ほら、石橋さん、お姉さんが、もうすぐ受験でしょ。だから、休んでるの」

「ええ？なんでですか？受験するのは麻菜ち……お姉さんで、麻緒じゃないのに」

「受験前に、インフルエンザにかかったりしたらたいへんだからって。本人が注意していても、石橋さんが、学校でうつされてくるかもしれないっておっしゃるのよ。お母さまが」

「そんなあ……」

「わたしも、それは心配しすぎでは？っていったのだけれどね」

先生はまた^③眉^{まゆ}を八の字にした。

あたしは、^④すつきりしない思いで、職員室を出た。

^⑤小学校と中学校は義務教育だ。ということは、学校で勉強するのって、小・中学生にとっては、義務なのではないだろうか。

その日、あたしは、図書館に行くと、(注1)レファレンスカウンターにいた人いきいた。

「すみません、義務教育のことを知りたいんですけれど」

「義務教育ね。じゃあ、憲法の本で調べてみたら？」

係の人が、子どもむけに書かれた憲法の本を教えてくださいましたので、あたしは子ども室の椅子いすにすわって、その本を読みはじめた。そして、読みすすめるうちに、思わず声をあげてしまった。

「ええ？ちがうんだ……」

その本に書いてあったのは、小学生や中学生が学校で勉強することが、義務教育ではない、ということだったのだ。

教育というのは、子どもにとって、義務ではなくて権利なのだ。そして、国とか保護者たちは、子どもが教育を受けられるようにする義務がある。つまり、義務を負っているのは、子どもじゃなくて、大人なのだ。

でも、それに照らしあわせると、麻緒が学校を休んでいることはどうなるのだろうか。

もしも麻緒が休みたくて休んでいるなら、それでいいのかもしれない。子どもにとって、学校に行くのは義務ではないのだから。けれど、麻緒が学校に行きたいのに、行けないのだとしたら？教育を受ける権利を、うばっていることになる。

だれが？

あたしの耳に、「ポストに入れておいてくれる？」といった、麻緒のお母さんの言葉がよみがえった。以前は、笑顔でドアを開けてくれたのに。

それから、このあいだ、麻緒があたしにいった言葉を思い出す。——大人になったら、ほんとに政治家になればいいよ。それで、ちゃんと、子どものことか、学校のこと、考えてよ……。

麻緒は、あるとき、次の日から学校を休むように、お母さんにいわれていたのかもしれない。でも、ほんとうは休みたくなくなかなかったんだ。

いや、決めつけてはいけない。あたしは、図書館を出て家にもどると、麻緒のケータイに電話をかけた。ところが、麻緒は電話に出なかった。どうしたんだろう。

麻緒から電話がかかってきたのは、その日の夕ご飯のあと。夜九時をすぎたころだった。

そのとき、あたしはリビングでテレビを見ていた。

「もしもし、照葉？」

「あ、麻緒……」

おたがい名前をよびあったあと、しばらくだまりこむ。さっきは自分から電話をかけたくせに、なにをいったらいいのかわからなくなってしまう。

しばらくして、あたしはふーっと息をはいてから、思いきってきいた。

「麻緒、病気じゃないよね」

「うん」

「あたし、先生にきいた。麻緒、麻菜ちゃんのために、休んでるって」

「……うん」

「麻緒、それでいいの？」

「……しようがないよ。けつきよく、ママにはさからえないから」

「ねえ、麻緒、あたし、今日、図書館で調べたんだ」

「調べたって？」

「義務教育のこと」

あたしは本に書いてあったことを麻緒に話した。

「……だからね。親とか、国は、子どもに教育を受けさせなくちゃいけないの。でも、子どもが学校に行きたいと思っているのに行けないとしたら……病気とか、学級閉鎖とかだったらしかなないけど、それって、教育を受ける機会をうばっているんだよ」

「そうなんだ……」

「だから、麻緒が学校で勉強したいと思ってるなら、それは憲法で定められてる権利なんだし、お母さんにいってもいいんじゃないかな」

けれど、しばらく麻緒から言葉は返ってこなかった。そしてついぶんたってから、ぽつりと小さな声でいった。

⑥「ごめんね。照葉」

「ごめんね？なんで？なんで麻緒があやまるの？でも、こんなふうに元気がない麻緒の声をきくのがつらくて、あたしも、

「じゃあ、また、電話するね」

「といって、電話を切った。」

「キッチンで片づけをしていたお母さんが、顔をのぞかせてあたしにきく。」

「電話、麻緒ちゃん？」

「うん」

「麻緒ちゃん、どうかしたの？」

「学校、休んでる」

「あら、風邪でもひいたの？」

「そうじゃない。麻菜ちゃんが受験だから。麻緒が学校で風邪をうつされたりするとまずいから、受験が終わるまで、学校休むんだって」

「そうなの？たいへんね。中学受験って」

「でも、麻緒は、休みたくなかないんだよ」

「そうよね。でも、こればかりは……」

「お母さんは言葉をにがした。」

次の日の放課後、あたしはまた職員室に行った。そして吉田先生に、きいてみた。

「学校で勉強したいのに、家の都合で休ませるのって、子どもの教育を受ける権利を守ってないんじゃないですか？」

「それって、もしかして、石橋さんのこと？」

「……はい」

「心配してるんだね」

「あの、あたし、図書館で、憲法のこと調べたんです。義務教育って、てっきりあたしたちが勉強するのが義務だと思った。でもちがってた」

先生は、

「そうね」

というのと、少し間をおいてから、また口を開いた。

「でも、しかたがないの。石橋さんのおうちで決めたことだから」

「でも……」

「じゃあ、わたしが、ムリにひっぱって学校に来させたら、石橋さんのためになると思う？」

そうきかれたら、なにもいえなくなつた。そんなこと、できるわけないし、麻緒だつていやだろう。だけど、やっぱり麻緒がかわいそうだし、あたしの気もちもすっきりしなかつた。

あたしは、自分はまちがつてはいないと思つた。でも、麻緒のお母さんも、自分が正しいことをしていると思つている。今は、麻菜ちゃんが無事中学に合格することが、麻緒をふくめた家族にとつて、いちばん大事なことなんだと考えている。

職員室を出て、いったん教室にもどる。もうほとんどの子が帰つたあとだつた。教壇きょうだんに立つて、クラスを見まわす。今日、このクラスで休んだのは麻緒だけだ。その麻緒の席に、なぜだか光があたつていた。

⑦ くやしい。どうしようもなくくやしい。くちびるをきゅつとかみしめてうつむく。ふいに、涙なみだが一筋、流れて落ちた。そのとき、うしろの戸が開いて、だれか入つてきた。あたしはあわてて、涙を手ではらつた。入つてきたのは、美月みつきだつた。

美月に、泣き顔なんてぜつたいに見られたくない。あたしはまばたきを何度かしてから顔をあげた。

「あれ、ソーリ、まだいたんだ」

「あ、うん。美月こそ、どうしたの？」

「ちよつと忘れものしたから。……麻緒、休んでるね。どうかしたの？」

「風邪、みたい」

なんでかわからないけれど、あたしはほんとうのことがいえなかつた。

「麻緒ってさ、いつも自分が正しいって感じで、むかつくんだよね。先生だって、麻緒の味方するしさ」

それは、麻緒が正しいからだと思って、ちよつとむつとしたけれど、だまっていた。

「けどさ、麻緒が何日もいないと、なんか、はりあいがないなって」

「えっ？」

目が合うと、美月はすつと視線をそらした。そして少し間をおいてから、まったくべつのことを口にした。

「ソーリはさ……マジで、ママのこと、かつこいって思ったの？」

「思ったよ。だって、(注2) 田中さんは、ほんとうに区民が住みやすくなるようになって、いろいろ考えてる人だから」

「ふーん。やつぱ、ソーリって、変わってる。じゃあね」

というと、美月は教室から出ていった。

美月は、自分のお母さんが区議会議員を目ざすことに、まだ反対なんだろうか。でも、ちよつとだけ態度がやわらかくなつた気がした。だけど、あたしたち子どもは、親を選べないんだな、とも思った。それから、前に薫かおるがいった言葉を思いだした。

——なんか、不自由だよなって思う。子どもでいるって。

ほんとにそうだ。

麻緒のことでは、自分の考えがまちがっているとは思えなかったけど、なにもできなかった。子どもであることがほんとうにくやしかった。

けつきよく、あたしにできることは、プリントをとどけることと、ときどき電話をかけることだけだった。

運がよかったのは、麻菜ちゃんの第一志望の中学の受験が早くて、しかも、無事合格したこと。もしも落ちていたら、麻菜ちゃんの受験地獄じごく(これは麻緒の言葉だ)は、二月のはじめまでつづくところだった。

「麻菜ちゃん、受かってよかったね」

あたしがそういうと、麻緒はほんの少しだけ涙目になって、こつくりうなずいた。

「ほつとした。っていうか、やつぱり、受かってほしかった。おねえががんばってたの、知ってるし。むかつくときもあるけ

どぎ、根性こんじやうあるし見習うところもあるって、ちよつとは思ってるんだ」
麻緒は照れたように笑った。反発しても、けんかしても、やっぱりきょうだいがいる麻緒が、ちよつぴりうらやましくなっ
た。

(濱野京子『ソーリ!』より)

(注1) レファレンスカウンター……調査・研究に必要な資料探しの手助けをしてくれるところ。

(注2) 田中さん……美月の母親。

問1 —— ①「照葉、政治家目ざしなよ」とありますが、麻緒はどうして照葉に政治家になることをすすめるのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・照葉をおだてることで、自分のことを気づかってくれる照葉のやさしさへのお礼をしようと思ったから。

イ・照葉がかつて従姉に政治家に向いていると言われた話を出すことで、自分の話題から逃れようと思ったから。

ウ・照葉が政治家になって、今の自分のように、きちんと対応してもらえない子どもを出さないようにしてほしいと思ったから。

エ・素質だけでは政治家にはなれないが、小学生の今から政治活動を始めれば、話題になって、将来の選挙で有利になると思ったから。

問2 —— ②「応答したのは、麻緒のお母さんだった」とありますが、このあとの照葉とのやりとりから読みとれることの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・照葉を麻緒に会わせると、学校を休んでいる理由を問いつめられて、麻緒がかわいそうなことになる。麻緒のお母さんは思っている。

イ・麻緒のお母さんは麻緒を学校に行かせない理由を照葉に説明することを避けるとともに、外部との接触による病気の感染を防ごうと思っている。

ウ・麻緒のお母さんは麻緒の姉の受験指導でとてもいそがしく、照葉を家の中に入れてお茶を出したり、お礼のあいさつをしたりする心の余裕がない。

エ・麻緒のお母さんは麻緒を学校に行かせない本当の理由を子どもに説明するのはめんどうだし、照葉と麻緒が仲のよいことをよく思っていない。

問3 ——— ③「眉まゆを八の字にした」とありますが、ここからわかる先生の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア．麻緒の休む理由を聞いた照葉に、どのように説明すればいいか悩なやんでいる。
- イ．麻緒の母親の一方的な考えを説明しなければならぬことを不愉快ふゆかいに思っている。
- ウ．照葉から自分の対応のまずさを責められるのではないかと恐おそれている。
- エ．姉の受験を心配するあまり、麻緒まで休ませる麻緒の母親の対応に困っている。

問4 ——— ④「すっきりしない思い」とありますが、照葉の気持ちはどうしてすっきりしないのですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア．麻緒に学校を休ませる母親のやり方が正しいのかどうかを判断することができないから。
- イ．受験生の姉を優先させて麻緒に学校を休ませる母親のやり方は過保護であり、休む理由として納得なっとくできるものではないから。
- ウ．なぜ麻緒に学校を休ませてまで姉の受験にこだわるのか、麻緒の母親の本音を確認かくんできないから。
- エ．麻緒のことをぎせいにして学校を休ませている事実を放置する学校の対応は、おかしいのではないかと思っているから。

問5 ——⑤「小学校と中学校は義務教育だ。ということは、学校で勉強するのって、小・中学生にとっては、義務なのではないだろうか」とありますが、義務教育について照葉が憲法の本で調べた結果、どのようなことに気づきましたか。次の空らんにはまるように二十字以上三十字以内で答えなさい。(句読点などの記号は字数にふくみます)

麻緒が学校を休んでいるのは、

ことになるのかもしれない。

問6 ——⑥「ごめんね。照葉」とありますが、麻緒はどうしてこのように言うのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・自分のことを心配してくれる照葉の気持ちはわかるが、これ以上話をすると照葉をきらいになりそうだと思うから。

イ・自分のことを心配してくれる照葉の言うことが正しくても、学校を休ませることに罪悪感を持つ母親にこれ以上迷惑をかけられないと思っているから。

ウ・自分のことを心配してくれる照葉の気持ちにこたえたいけれども、母親にはさからえないし、姉の受験には協力した方がよいと思っているから。

エ・自分のことを心配してくれる照葉の気持ちをありがたく思うけれども、事を大げさにして学校問題になれば、姉の受験に影響すると思ったから。

問7 — ⑦ 「くやしい。どうしようもなくくやしい」とありますが、どうしてですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・自分の考え方を理解してくれていると思っていた先生が、実際は麻緒が学校に来ることに対して関心がないことを知ったから。

イ・麻緒を助けるために行動を起こしたことが裏目に出て、かえって麻緒が学校に出て来にくい状況じようきようを作ってしまったから。

ウ・自分が麻緒を助けるために憲法を調べたり、母親や先生に頼たのんだりしたにもかかわらず、自分の考えを無視されたから。

エ・自分の考え方に自信はあるが、それが通らない現実を目の前にして、麻緒を学校に来させることができない自分の無力さを痛感したから。

(おわり)

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	れ	れる
	⑦	③
	⑧	④

二

問 1

問 2

1

2

3

4

問 3

35

25

問 4

暮らし

問 5

問 6

三

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

ことになるのかもしれない。

麻緒が学校を休んでいるのは、

20

30

問 6

問 7

※	※	※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---	---	---